

日韓市民ネットワーク・なごや

会報 No.38

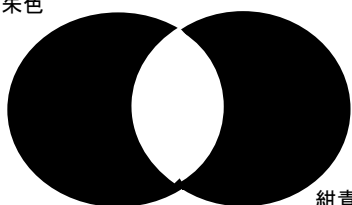
2007-8-25

일한 시민 네트워크・나고야

Home Page : <http://www.nikkannet.jp/>

発行者：後藤 和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238
TEL/FAX 0587-56-6788

朱色



紺青

目次

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1. 巻頭特別寄稿 | 支援者：金龍鐘 |
| 2. 事務局通信 | 統括幹事：後藤和晃 |
| 3. ニュース | 事務局 |
| 4. 会の活動報告とお知らせ | 事務局 |
| 5. 高麗大学学生とホストの感想文 | 参加者の声 |
| 6. 会員の広場 | 会員の皆さん |
| 7. ソウル通信 | 坂野慎治 |

巻頭特別寄稿

アイ ラブ コリア

支援者 金龍鐘



1996 年、名古屋韓国教育院・権五暉院長から名古屋大学・飯田敏秀教授を紹介され、愛知県韓国人経友会・趙樟浩会長の財政的支援を得て愛知韓国文化会が設立されました。設立総会を前にして、趙会長は「飯の種にもならない文化会に果たして人は集まるだろうか?」と、言う問いに対し、「私たちは本を読み、心を食べて生きております。」と、権院長が答えましたが、総会当日の会場は補助いすを出すほど超満席になりました。鄭煥麒経友会初代会長の祝辞につづき、飯田教授の韓国語の挨拶を耳にした時、在日韓国人社会で韓国語の使用が薄らいでいる中で、「日本人がこれほどまで韓国語を話せるとは」と、驚嘆するばかりでした。その後、韓国学校のパーティーで、日ごろ見かけぬ楽しそうに語っているある日本の若者に、「君の職業は? どうして韓国に旅行したり、このようなパーティーに来るの?」と、訊くと、「僕は大工です

が・・・う～ん・・・韓国が“大好き”なんです」と、胸に響くような歓喜を呼び起こす声が、戦前から日本人の朝鮮人嫌いが頭に叩き込まれていたせいか、聞き間違えたかなと思うほど初めて聞いた嬉しい言葉でした。

翌年、名古屋国際センターの韓国フェスティバルであまりの嬉しさに婦人会の人々の中に混じって韓国のチュムを踊りまくりました。この縁で知り合ったのが、当時、名大大学院生で韓国民間大使に選ばれた李尚勲さんでした。また韓国学校の弁論大会で優勝された野村 哲さんは家族ぐるみの韓国ファンであると知り、そして、早稲田時代に作家・金達寿と接したこともあるという、NHK に入社後、韓国大邱の KBS で仕事にかかわった後藤 和晃さんに出会い、韓国の歴史の造詣深さと韓国に並々ならぬ情熱を感じました。以後、9 年余り、自主自立で運営されてこられた日韓市民ネットワークなごやは、この度、5 月に、高麗大学生訪問団 14 名を迎え、中川さんの腕前の料理で韓国学校にて交流の夕べを催されました。

1996 年、戦後初めて、日韓思想学会ソウル学術会議が東国大学で開催され、日本から 20 名ほど参加しましたが、それまで、中村 元博士が創設された比較思想学会に東国大学・仏教美術史の洪教授が参加しただけで、相互開催のはずであった学術会議は二度と開催されませんでした

た。1999年、国連大学で開催されたTokyo'99国際会議に300人のうち、韓国から参加された学者は皆無でしたが、2002年8月、幕張で開催された国際生命情報科学学会シンポジウムに韓国の学者数名の中、若い学者と出会い、翌年3月、同シンポジウムで延世大学・朴ミンヨン教授が大学院生一人連れて参加されているのが目に付きました。2005年には2月、9月と、同シンポジウムにソウル大学・蘇教授が4名の大学院生を同行し、ほとんどの大学院生

は外国は初めてであるが、研究発表のときの流暢な英語の受け答えが印象的でした。

今回、韓龍震教授に引率された13名の高麗大学生も初めての来日で、日本が大好きな学部生だったと思います。このような若人の日韓交流こそ日韓親善の本来あるべき姿ではないでしょうか。日韓市民ネットワークなごやはまたもや快挙を成し遂げました。“大好き”より勝る外交戦略はあるのでしょうか。アイラブコリア！ アイラブジャパン！！

◇ 事務局通信

事務局 統括幹事：後藤和晃

◎ (1) 高麗大学生の対日観が急変

～ 日本人への好感度アップに会員が寄与 ～

ソウルの名門大学、高麗大学教育学部の学生が名古屋を訪問したのは5月のことでしたが、このほど彼らの日本や日本人に対する好感度が旅行前に比べて急上昇していることが分かりました。

これは日本訪問から帰った後、高麗大学で取りまとめ、会に送ってきた感想文で明らかとなったもので、学生たちの心理に大きな変化をもたらした要因は、会員の皆さんが持ち続けている韓国や韓国人への限らない関心と、親しみの気持ちであることも、よくわかりました。

高麗大生の感想文は、ホストの文と共に会報の後半でご覧いただく事とし、ここでは急上昇の背景を少し考えてみましょう。まず今回、訪問してきた学生たちは、日本や日本人に対する関心の度合いは、当初、一般の韓国人と変わらず、それほど高くなかっただろうと推測できます。

彼らは教育学部で教育学や数学、地理などを専攻しており、日本語や日本文学、日本史などを学んでいる学生は皆無だったからです。従来、大邱や光州からやってきた交流団の学生の多くが日本語科だったのに比べると、大きな違いがありました。しかも、ここ数年間、韓国のノ・ムヒョン大統領と日本の小泉・安倍両首相との間には、北朝鮮に対する政策の違いなどから隙間風が吹き、関係は冷却しきっていました。韓国の一般市民や学生の日本への関心も、うすまる一方だったと言えるでしょう。

そんな高麗大学の学生たちを教育学の韓龍震教授が「君たちは日本をもっと、よく知るべきだ」と説得し、名古屋に連れてきていただいたのです。

すると、日本に対し良く言えば白紙状態だった高麗大の学生たちが、日韓市民ネットワークの会員と交流する中で、日本や日本人への関心に目覚め、その度合いを急上昇させていったのです。

その理由を一言で言えば、会員ホストたちが受け入れた高麗大生に「限りなく友情をそそいだ」ことにあるでしょう。感想文を読むと「日本人たちが何とか意思を通じようと必死になって韓国語を勉強し、対話しようと努力している、自分はそんな努力は少しもなかったことが恥しい。なるべく早く日本語をマスターし交流できるようにしたい」という声が多く見られました。

「必ず日本語を勉強する」と表明した学生が、これほど多かったことは過去にはなかったのではないのでしょうか。日本人の好意を、これほど純粹無垢な形で受けとめ、日本人との交流に決意を示す彼らに感動さえ覚えます。様々な困難を乗り越え、高麗大生の名古屋訪問を実現していただいた韓龍震教授に心からの感謝を申し上げます。



◎(2) 百済再発見紀行を12月に延期します！

～ 12月7日(金)から10日(月)までの3泊4日 ～

10月初旬に予定していた百済再発見紀行は、航空運賃が通常より3万円も高くなる時期だと分かり、再検討の末、12月7日(金)からの3泊4日に変更しました。参加される皆さんは事情をご理解いただき日程の調整をお願いします。

百済をテーマに掲げる紀行は、今回で3回目となります。第1回はいわば定番コースの公州、扶余、ソウル廻りでした。第2回目は「韓の国、仏が来た道紀行」をテーマに、全羅道の靈光(インド僧マラナンダが上陸して百済仏教がスタートした所)から、ソウルに至るまでの百済仏教の聖地を廻るものでした。今回は最新の考古学の成果に踏み込んだ紀行をしたいと考えま

す。ポイントは下記の3点です。



①旅行は益山(イクサン)、扶余、ソウルの3地点を重点的に廻ります。

・ここ数年、扶余から益山にかけての地区で百済関係の発掘が相次ぎ、成果が上ってきています。扶余では王宮跡と推定されている官北里遺跡や定林寺遺跡、王興寺遺跡、益山では弥勒寺遺跡をはじめ王宮であったことが確実となった王宮里遺跡や笠点里古墳群など見どころが多い。できれば初日には益山でまさに発掘中の現場を訪問することを考えています。

・ソウルでは昨年10月に中国の集安で見たと同様の高句麗様式の積石古墳や土城を訪ねます。

②韓国の考古学の若手教授に同行をお願いします

・同行していただくのは初日の7日(金)から9日(土)までの3日間。

同行をお願いする方は日本語が自由自在の円光大学の李タウン教授です。李教授は福岡にある九州大学に留学し、日本の韓国考古学の第一人者といわれる西谷正教授に師事した人で、帰国後は4大地方大学の一つで仏教系の円光大学で考古学を教えています。

円光大学のある益山は、先に記したように百済王・武王の王宮や壮大な弥勒寺の双塔・伽藍が建ち並んだ百済文化の聖地でした。その益山の遺跡の数々を全てを知り尽くしている李教授に案内・解説していただける訳で、充実した紀行になること請け合いです。

・李教授のご父君は1928年に大阪で生まれ、韓国に帰国の後は、韓国史(とりわけ百済史)の研究や出版を続けている著名な歴史家であり、作家でもある李夕湖(イ・ソッコ)さんです。百済に関する多数の著作を通し、日本にも数多くのファンがいる方ですが、この李夕湖さんの聲(こゑ)にも接することができるでしょう。百済のロマンを語り出したら止まることがないその情熱に驚かされるはずです。

③新発見が証言する日韓の古代文化の共通性

～ 陽物型木簡が語るもの ～

百済の領域は古くは馬韓地域と呼ばれていました。その馬韓の時代から百済の時代を通し存在し、古代日本の習俗にも共通しているのが陽物(男性のシンボル)信仰です。陽物を豊作の願掛けとして祈るだけでなく、魔除けの霊力があるものとして都城や村々の出入や四隅に置いたことが分かってきました。扶余の城門があった陵山里遺跡や日本の平城宮や多賀城遺跡からも陽物型木簡が出土するなど、大きく注目され始めています。日韓の論文を参照にしながら、こうした出土物の現地も訪ねます。

過去、会の歴史紀行に参加した皆さんには別途、参加の有無を確認する便りを出しますが、確実に参加する方は事務局後藤まで電話・FAXなどで早めに御連絡ください。

◎韓国紙が会の紹介記事を掲載

～ 東洋経済日報・7月20日付紙面 ～

経済情報に重点を置いた韓国紙、東洋経済日報が、この7月20日（金）の紙面で日韓市民ネットワーク・なごやの記事を大きく掲載しました。この記事は、東洋経済日報が名古屋支社開設50周年を記念する特集号の一部分を構成するものです。

記事の掲載にあたっては、東京本社の編集部から「東海地区で継続して日韓交流につとめている貴団体を紹介したいので、会の概要など書いて欲しい」と事務局に依頼がありました。依頼をありがたく承諾し、書いたのが右の記事ですが、会の発足から現状までを、まとめて書いておきましたので、必要がある時にはコピーして利用してください。

第3種郵便物認可

名古屋から広がる交流の輪

韓国大好き人間集合

交換ホームステイなど実施

「日韓市民ネットワーク・なごや」(http://www.kor-japan.net)は韓国が大好きな人々の集まりで、名古屋を中心に活動している。この会が発足したのは98年2月、名古屋市の国際センターの嘱託職員だった韓国人青年・李尚勳氏が1年にわたって「韓国理解講座」を展開した時、講座に通いつめた日本人市民たちが「いつそ会をつくろう!」と結集して生まれた。以来9年半、当初30人だった会員は今は120人を超える。90%は「なぜか韓国が大好き」という日本人。大好きな理由がドラマや映画、韓国語などへの関心、そして戦前に韓国で生まれたなどさまさま。

活動内容も多彩だ。ソウルをはじめ光州や大邱などの大学や団体と結んで大学生の交換ホームステイを例年実施しているのを始め、留学生や在日社会、韓国総領事館など多角的な交流を積極的に行っている。

また「互いを深く理解するため、古代より現代に至るまでの日韓交流史を現地へ旅し、自分の目で確かめよう」を相言葉に歴史探訪紀行も定期的に実施している。旅行先は国内や韓国の各地は当然として、去年は高句麗建国の地である中国東北(旧満州)にも及んだ。最近ではチングなどった韓国の友人が旅行や旅行中の食事会に参加することもある。

足かけ10年の活動の結果、日韓双方で協力の輪が広がってきた。教室を無償で開放して頂いている名古屋韓国学校をはじめ、ボランティアで解説を頼んでいる奈良の高僧たちや歴史、考古学の先生など枚挙に暇がない。

一方、かつて交流した留学生たちが韓国で大学や高校の日本語教師として、あるいは貿易や建設の会社員として活躍しているのを耳にすると本当に嬉しい。中には韓国人技術者として、初めてシールドという巨大トンネル掘削機を駆使して漢江の下に地下鉄用のトンネルを掘り進めている青年もいる。

彼ら彼女らの心の中にはある日本人への友情の火種がさらに周辺に広がる。日韓市民ネットワーク・なごや事務局・後藤和晃

よう期待しつつ、活動を続けていきたい。(日韓市民ネットワーク・なごや事務局・後藤和晃)



光州市訪問団と交流する日韓市民ネットワーク・なごやのメンバーたち(名古屋韓国学校)

◎ 9韓の青少年ソウルで囲碁交流

～ 名古屋市・いたか(猪高)囲碁クラブ ～



7月23日(月)、名古屋の少年少女のための囲碁クラブ「いたか」の小学生たちがソウルの囲碁教室に乗り込み、二日間にわたって現地の子どもたちと囲碁の交流を行いました。訪問したのは、小学生3～4年生を中核とする囲碁の才能のある子ども9人と、付き添いの大人4人でした。このいたか囲碁クラブを主宰しているのは教員OBで囲碁歴の長い名古屋市の会員、加藤勝氏で、同じく会員の鈴木幸之助氏も囲碁の指導の手助けをしています。

元教員の加藤勝氏が創設した囲碁教室だけに、目標を“少年・少女の頭脳の発達を促すスポーツ囲碁の実施”と定め、実力をアップさせる最善の方法として、少年囲碁の強国、韓国の児童との実践対決を行ってきました。

韓国への遠征および韓国児童との対戦は、今

回で5回目を数えます。参加した名古屋の9人の小学生(アマ10級～アマ4段)は力に勝る韓国の児童を相手に少なくとも7戦、多い場合は9戦を戦い抜きました。最高の勝率6勝1敗から下は2勝7敗と対決の成績は様々でしたが、どの子も強い相手に挑戦し続けた結果だけに、表情は満足そうでした。

リーダーの加藤勝氏は一昨年の暮に病に倒れ、1年余り韓国訪問を封印してきただけに、大きな喜びの表情を浮かべ、こう話していました。

「こうして韓国の子の胸を一度借りると、やる気が一気に開花するんですよ。2～3年前に韓国の子どものとの対決を経験した小学生の多くは、子どもの囲碁界で愛知県や名古屋市を代表する選手に成長しているんです。西山小5年の森川君などは、夏の全国大会で5位に入賞するまで強くなりました。」

またやはりソウルに付き添った鈴木幸之助氏は「囲碁の上では子どもたちは何の障害もなく対決を楽しんでいます。食事を共にする時は身振り手振りでも会話をしていますし。相手を理解しようという気持ちが両方に芽生えているようです」と話します。囲碁を通して交流する子どもたちの将来にも明るいものが見えているように思いました。

◎ 9韓の高校生が9本による“圧制史”検証の旅

～ ハムケ(婁)の学生たちに同行・短信 ～

名古屋の囲碁少年たちが帰国した7月25日(水)、今度は愛知の高校生集団(付き添い含め22人)が仁川空港に降り立ちました。4年ほど前から名古屋に事務局を置いて、日韓の高校生の本音を語りあう交流を実践しているハムケ＝共に高校生平和特派員実行委員会のメンバーです。

リーダーは東海高校の教員で私たちの会員でもある久田光政氏です。久田氏は元々、阪神・淡路大震災や新潟地震などに際し、高校生をボランティア集団として組織し、被災者の救援活動を行ってきたハートフルな先生でした。4年前の2003年、愛知県高校生フェスティバルの実行委員会と地元の新聞社からバックアップを受け、ハムケを立ち上げました。

以来、毎年夏、韓国を舞台に、日韓の高校生

が一つのバス、同じ宿に身を置き徹底的に同行、最後の分断国家といわれる韓国の現実や、戦前の日本が朝鮮(朝鮮人)に対して行った圧制の現実を直視し、本音を語り合うという稀有の試みを繰り返してきました。今、このハムケに韓国側から参加しているのは、全羅北道の全州にある伝統文化高校の生徒たちです。

5泊6日に上るこのハムケの旅の全体を紹介するには、とても紙面が足りないのです、一部のみを報告しておきます。

まず最初に全州で2泊のホームステイを行ったあと、日韓の高校生たちは分断や圧制史の現場を徹底的に廻りました。日本が砲艦外交の舞台にした江華島、1000万もの離散家族の絆を引き裂き続けている軍事境界線、独立運動家たちを留置し拷問を加えた西大門刑務所跡、日本軍

の下で慰安婦として苛烈な青春を送ったハルモニ（おばあさん）たちが住むナヌムの家等々です。

これら行程の中で、ナヌムの家への訪問と生徒たちの反応を取り上げお伝えしましょう。ここには今 10 人ほどのハルモニが余生を送っていますが、生徒たちに辛い体験を話した人は、姜日出（カン・イルチュル）さん 78 歳でした。彼女は慶尚北道の尚州で生まれました。学校に通っていた 15 歳の時に報国隊を選抜するからと巡査に連れ出され、当時の満州に送られたそうです。そして長春や牡丹江の慰安所で慰安婦としての生活を送りました。戦後、なかなか郷里に帰る決断もできないまま中国人と結婚、やっと韓国に帰国したのは 2000 年になってということでした。ハルモニの話を聞き、資料館も見終わった生徒たちの感想は次の通りでした。

（A）日本の生徒たちは、こういうひどい歴史があったことも知らないまま大人になってゆく。知らせないようにする日本政府のたくらみがあるのではないかな。

（B）慰安所に通い易いよう割引券やクーポン券が発行されていたという。娯楽場、遊園地に遊びに行くような感覚で、女性を物としてしか見ていなかったと思う…。

（C）日本人として、男として、人間として本当につらかった。こうした事を繰り返してはいけない。絶対繰り返さないことが僕らの役目だ。

以上は日本人の男子高校生たちの感想で、韓国の生徒たち（女子生徒が多かった）は、皆「日本の仲間と一緒に訪問し、一緒に話を聞いてよかった。帰国したら他の友だちにも話してあげて欲しい」と語っていました。彼女たちは、日本人としては直視することが辛い歴史の現場を次々と訪れている名古屋の高校生の心情を思いやり、表現を抑えているようにも見えました。

6 日間、同行した結果、両国の高校生が、英語、日本語、韓国語、身ぶり手ぶりとあらゆる方法を使って懸命に対話している様子にうたれ、未来を感じました。とことん厳しい歴史を検証した若者たちは「再びその道を互いに歩くまい！」という同意を成り立たせ、以後も往來を繰り返すことを決意しているようにも見えました。



◇ 会の活動報告とお知らせ

1.報告

1) 高麗大訪問団の受け入れ

～ 5 月 23 日(水)～28 日(月)～

5 月下旬に高麗大学の教育学部から韓龍震教授以下 13 人の訪問団を迎え入れました。5 月 23 日（水）の午前 10 時 30 分、セントレアに到着した一行は、日韓市民ネットの用意したマイクロバス（ボランティアの星原幸次郎さんの運転）に搭乗、2 泊 3 日の奈良・京都見学に向かいました。奈良・法隆寺では大野玄妙管長、東大寺では執事長の筒井寛昭さんからそれぞれ、朝鮮仏教との係わりや日本仏教の特質など詳しい説明を聞きました。また京都では 16 世紀末の慶長の役に際し、日本軍が秀吉に戦果を示すため送ってきたという朝鮮の民衆の耳や鼻を供養した耳塚などを訪れました。さらに京都大学では教育

学部の学生と交流したのち、名古屋に戻りホームステイに入りました。帰国前日は韓国学校で盛大な交流パーティを行いました。出席者は日韓あわせて 64 人、最後に韓国語と日本語で歌ったアリランのハーモニーが素晴らしく、高麗大生も感激していました。

この高麗大の一行を迎えるために会員の皆さんに募金をお願いしたところ、表にまとめてあるように予定を超える寄付をいただきました。厚くお礼申し上げます。また高麗大受け入れ全体の会計報告も寄付一覧と共に掲載いたしますので、併せてご確認ください。

寄付の報告（敬称略）

浅井郷士	3,000	金岡えつ子	5,000	成 功	20,000	宮本昌子	1,500
荒木巳威子	1,000	神谷俊三	5,000	崔 崇浩	3,000	安田 守	5,000
池田 進	6,000	神谷良子	2,000	土本美恵子	3,000	山田あき子	3,000
石川総子	3,500	小出宣昭	6,500	出口和代	3,000	山本玲子	3,000
石川信行	3,500	後藤和晃	5,000	土岐良文	5,000	匿 名	2,000
伊藤みつ子	3,000	堺澤一生	3,000	中川修介	1,500	匿 名	500
伊藤義郎	5,000	佐々木英之	1,500	長澤 進	6,500		
岩下洋子	1,000	佐藤昭子	3,000	長田竹子	3,000	顧問・会員外	
鵜飼 満	5,000	佐藤文臣	3,000	成瀬一男	10,000	鄭 煥麒	50,000
梅田 徹	3,000	鈴木一字	5,000	野村 哲	10,000	名成産業	30,000
大久保孝造	5,000	鈴木幸之助	20,000	野村博司	13,000	横内 恭	10,000
太田道子	5,000	須田奈保美	1,500	原 和夫	1,500	石原俊洋	10,000
大西さおり	2,500	瀬尾文子	3,000	牧野 司	5,000	名古屋韓国学校	10,000
大橋幹夫	3,000	竹中志保美	2,000	増田一夫	3,000	松本太郎	5,000
岡崎洋子	6,000	田口良浩	5,000	水崎弘三	2,000		
加藤昌美	1,500	田澤 満	3,000	峯崎光雄	3,000		
人員数	（ 顧問・会員：58 名 会員外：2 名 ） 計 60 名					合計金額	353,000

差し入れ（敬称略）石原 俊洋（十勝ワイン）

今回も沢山の寄付を頂き、深く感謝申しあげます。領収書を発行しておりませんので、万一記載次項に誤りなどございましたら、事務局までご連絡下さいます様に、お願いいたします。

収入	会費 119,500	支出	料理・飲物・器類 126,000	
	計 119,500		会場の飾付け 4,805	
			計 130,805	

収入	寄付金合計 353,000	支出	奈良旅行経費 205,130	差引残高 136,565
	計 353,000		計 205,130	

日韓料理食べ交流

市民 ネット 高麗大学生ら招く 名古屋

韓国・高麗大学の学生と交流を深める「日韓交流の夕べ」が二十七日、名古屋市中村区の名古屋韓国学校で開かれた。日韓の草の根の交流を行っている「日韓市民ネットワーク」が、この日は日本側から、同ネットワーク関係者や韓国人留学生ら約五十人が参加。ネットワークの名譽顧問を務める横内恭・中日新聞社相談役が「日韓には不幸な歴史もあつたが、それを乗り越えて新しい道を皆さんと歩みたい」とあいさつ。高麗大のハン・ヨンジン教授が「学生にとっては日本の大学生らとも交流の招きで来日し、京都、奈良の日本文化に触れ、現地で触れ合うことが大切。心から感謝します」と応じた。

この後、参加者らは両国の料理を食べるなどして交流を深めた。高麗大の学生の一人は「日本には初めて来た。親切にしてください、思い出になりました」と話した。（渡辺泰之）



高麗大学の学生らを招いて開かれた交流会＝名古屋市中村区で

中日新聞
2007年5月28日

2) 留学生の奈良歴史紀行

～ 7月8日(日) ～

5月の高麗大の受け入れに際し、寄付金が多く集まり、終了後に13万円の残金がありました。このため、寄付の趣旨を果たそうと、こんどは名古屋にきている韓国の留学生の奈良歴史紀行を行うこととしました。高麗大生とホストの感想文は10ページ以降にまとめてあります。興味深い記述が多いので、ぜひお読み下さい

7月8日(日)、名古屋の大学や日本語学校で学んでいる留学生に会員の歴史ファンのメンバーを加え、22人で大型バスに乗り奈良に行きました。この日も東大寺、興福寺、平常宮跡、そして法隆寺と古代の日韓交流の舞台だった寺々や史跡を廻ってきました。東大寺では高麗大訪問団の時と同様に、執事長の筒井寛昭さんが、一行を大仏の膝の所まで招き上げ、仏教の教えを説明されました。東大寺の伝える華嚴宗は、古代新羅で隆盛を誇った仏教だという話では、学生たちも古くからの縁を感じているようでした。



名古屋に帰ってから、同行した留学生会長のパク・スヨン（朴秀用）君からのメールです。



奈良旅行、みんなが本当に喜んでいました。ありがとうございました。後藤さんの知り合いのお坊さんの話は、すごく楽しくて韓国と日本との歴史に今までより興味を持つようになりました。やっぱり韓国と日本は、兄弟、友だち、親戚という近い関係にあるんだ！と思いました。ネットワークの皆さんがそれぞれ留学生に一生懸命、説明したり、面倒を見てくださったりありがとうございました。留学生みんなの旅行への喜びや皆さんへの感謝の気持ちを代表してお伝えします。…（後略）

3) シニア・望郷のつどい

～ 4月30日(月) ～

戦前、朝鮮半島や満州に住み敗戦後、帰国してきたシニア会員の集まりが4月30日、名古屋駅前の居酒屋で開かれました。シニア会員の中には、大田出身者が多いため、大田・韓南大学から金城学院に留学中の女子留学生4人も招いて、計19人が賑やかに話の花を咲かせていました。この日、初めて参加したという方も2人いて、「できれば1年に2回位は、どこかに集まって話をしたいものですね」などと話しておられました。



2.お知らせ

1) 日韓市民“野遊会”のつどい

～ 10月8日(月・祝) ～

日韓市民ネットワーク・なごやでは、今年も大自然が残る犬山市の八曾自然休養林を舞台に、野遊会を行います。大駐車場に近いもちの木キャンプ場の屋根付きバーベキュー場を基地にしますので、老若男女いろんな方に参加していただけるでしょう。

留学生や体力に自信のある方は、溪谷や尾根を2時間歩くハイキング。子供たちは、基地の前を流れる浅くて、きれいな小川で川遊び。体力に自身のない方々は基地周辺の散策と友だちとの対話を楽しんでいただきます。

実施要綱は次のとおりです。



1, 集合時間

- ・車の場合～もちの木キャンプ場の基地に9時半までに
- ・電車の場合～名鉄小牧線羽黒駅に8時45分までに集合。駅からは会員の車に分乗し、もちの木キャンプ場へ
(台風および台風なみの低気圧による悪天候の時を除いて実施予定)

2, 遊びの時間

- ①山ハイク班 溪谷と尾根歩き
- ②川沿い散歩班 溪谷の道と小さな滝
- ③親子で川遊び班 基地の前の小川で遊ぶ

3, 山の食事を楽しもう！の時間 12:00～14:00

素朴な山の食物を作って、美味しくいただきます。

(例) 野菜焼き、ソーセージ焼き、チヂミ、カレーライスなど

※お酒もある程度用意はしますが、車を運転する人は絶対にお酒を飲まないように願います。

※もし可能ならば手作りの料理や菓子など少しずつ持参いただければ楽しみが増えるでしょう。

4, 参加費

留学生・小学生～中学生 500円 高校・大学 1,000円 成人 2,000円

5, その他

- ・申し込み方法 会事務局へFAXで。(0587-56-6788)
- ・キャンプ場内に入るための1人200円は会で支払うようにしますが、車で来る方は、各自1台500円の駐車料を支払うようお願いいたします。
- ・もちの木キャンプ場の地図は会のホームページのニュース欄で見えるようにしますので、ご覧ください。

4) 新会員紹介

前回の会報編集以降に入会された方で、8月23日までに受付完了されている方々です。(敬称略)

近くて遠い国といわれていた国、日本。その国への旅で私の印象に残った事をいくつか書き留めておきたい。

5月23日、名古屋の空港に着いた私たちを、まるで何年ぶりに帰郷してきた我が子を迎えるように、こぼれるような笑顔で迎えてくれた人たちがいた。その中で韓国語がとても上手だったのが年配の後藤さんと星原さんで、この2人はタイプはまるで違うものの、幼い頃からのチング（友達）同士のように見えた。そして女性たちの声は美しく軽やかで、テレビドラマに出てくるお母さんのような優しい人も暖かく私たちを迎えてくれた。その上、整った顔立ちの青年山田さんも、早速「エレベータに乗って行こうよ!」と親切に声をかけてくれる。もう1人忘れられない人がいた。昔は学校の校長だったというので私たちがいつも「校長先生!」と甘えていた鈴木さんだ。鈴木さんは、ずっと一番後ろを歩き人数のチェックをしながら私たちの1人1人を何くれとなく面倒を見てくれたが、この人の学校の生徒たちは本当に恵まれていたなと思われた。

鈴木さんから習ったある言葉が今も脳裏にこびりついている。それはお腹が空いた時の表現で先生は「おなかぺこぺこ!」と言いなさいと教えてくれた。そこで私はホームスティの間、この言葉を食事のたびに使ったが、なぜかホストのお父さん、お母さん（佐々木さん夫妻）が爆笑してしまうのだ。韓国に帰ってから私は辞書でこの言葉をよく調べたら、これは子どもが空腹を訴える表現だと分かった。

だから、ホストたちは私を幼い孫娘のように優しく扱ってくれたのだろう。本当に嬉しかったけれど、思い出すと少し恥ずかしい!です。



さて私たちは名古屋から奈良に向かい、世界文化遺産の法隆寺に着いた。そこでは寺で一番偉いお坊さんがわざわざ私たちのために、この

寺と古代の韓国の人たちとの深い因縁をじっくりと話してくれた。一緒に写真にもおさまって貰えるなど本当に親切な方だった。また次に訪れた東大寺でも、高い地位のお坊さんが大仏の膝の所まで招き上げてくれ、仏の教えのイロハを繰り返し説いてくれた。その熱心な態度に頭が下がる思いがした。



奈良を後に京都に向かった。まず訪れたのは壬辰倭乱、丁酉再乱の際、日本軍が朝鮮から秀吉の元に送り届けた朝鮮人の鼻を埋めたという耳塚だった。在日の先生が耳塚の由来など詳しく話をしてくれた後、皆でしばらく黙祷したことが記憶に残る。

その後は京大で親切な先生方と学生たちと交流することができ、一緒に昼食を摂りながら情報の交換ができたのもいい思い出だ。

そして、いよいよ名古屋に帰ってのホームスティのスタート。旅行に出る前、皆で不安を語りあってしたが、実際に体験してみると、こんどは「もう終わるのか!名残り惜しい!」との声が続出したホームスティ。私は佐々木さん夫妻の家で本当に運が良かったと思う。送られてきたアンケートでは韓国語は挨拶でいどとあったが、実際には上手な韓国語を話す方で、びっくりしたものだ。最新の電子辞書も使いこなすお父さんに料理が上手で天使のような笑顔のお母さん!お二人は、本当に自分の娘（あるいは孫娘?）を扱うように心を込めてもてなしてくれた。改めてお礼を言いたい。

最後の夜、日韓市民ネットの皆さんが大勢集まってくれた交流の集いでは、私たちの“可愛い娘”、イエダナさんのピアノに合わせ、皆が合唱した“アリラン”は今もありありと記憶に残っている。そして今一つ、私の脳裏に焼きついた印象、それは日本という先進国の国民性だ。

彼らの“笑顔を絶やさない親切で丁寧な姿、他人への配慮、ものを大切にする態度等々”そんな日本人の国民性にかなり感動を覚えた。良い

出合いができた皆さんに心からの感謝の言葉を伝えたい。

◎日本のイメージが劇的に変わった！

チェ・インファン

日本に旅行に行く前から、日本という国についてはある程度の知識があった。既に日本への卒業旅行を計画中で、自ずと日本のことを調査してある状態だったからだ。中学生のときから日本のアニメを見るようになり、今でも日本のアニメやドラマをずっと見ているので日本語で話してみようと、ちょっと期待していた(予想外にも旅行に同行してくださった皆さんの韓国語の実力は相当なもので、むしろ簡単な英語を使う機会すらなかった＝笑)。



今回のホームステイで受けた強い印象。その内の一つは、中学生の時に先生から聞いた話と殆ど一致していたことだ。その先生からはソニーの「ウォークマン」に関する話だったが、日本は最初にカセットテープを開発したわけではないけど携帯型プレイヤーを開発して普及した点で日本は最高だという内容だった。日本のお寺を見回しながら感じたことも、また同じである。仏教は日本から始まったものではないが、日本は日本なりの仏教を発展させ、それを今でもしっかりと守り続けているようだった。我が国の仏教に商業的過ぎるイメージを持っている僕には、日本の寺や僧がとても美しく見えた。

日本人に対する印象も、大きく変った。日本の歴史教科書の歪曲や小泉前総理の靖国神社参拝問題など、これらのニュースを聞くとそれが日本人に対する悪いイメージとなってそのまま残っていた。けれど、今回の旅行を通じて会った人たちを見てそのイメージは完全に消え去っ

た。奈良への旅行に同行して下さった皆さんはとても親切で、その部分がまず記憶に残る。旅行中お世話になった皆さんに、ここで感謝申し上げます。(後藤さん、星原さん、金岡さん、鈴木校長先生、鈴木奈津子さん、山田さん、本当にありがとうございました)。京都大学で出会った一人の大学院生も印象深い。その人は高校教師を経て大学院に入ってきたのだが、歴史の先生だったという。韓国の歴史教科書や近代史に詳しく、自身の授業に韓国の歴史教科書を使っていたと聞いて驚いたのは記憶に新しい。特に近代史の授業で日本とは感情的にも良くない韓国の教科書を使うなんて、本当にすごい人だと思った。

ホームステイについても、やはり忘れがたい楽しい経験だった。ボン・ジョヴィやACDC、エリック・クラプトンが好きだというホストさんとの楽しい夕食、夜遅くまで続いたボーリング大会。今思い出すだけでも、本当に楽しくなる。

5泊6日の日程を通じ、個人的な感情を整理する余裕も生まれた。3年生になってあれこれ考えることも多くなり、辛い日々が続いていたけれど、お陰でこの学期を楽に締めくくることができ力も湧いてきた。楽しかった思い出だけが残る旅行になったのは何よりも嬉しいし、この旅行で受け取ったことを後でお返しする機会があれば幸いである。



初めての海外旅行となる日本への旅、日本について何も知らず不安もたくさんあったけれど、ソウルに住む日本人のチング京子が、日本について詳しく説明してくれて、少し安心して出発しました。

最初に訪れた奈良と京都では、いにしへの日本を肌身で感じる事が出来た。その上、寺々では韓国の仏教とは全く違う雰囲気に出会えて良かった。東大寺大仏殿の荘厳さには心底感動した。

この奈良・京都への旅で大いに心残りだったのは私が日本語を知らないため多くの事を学べなかったことだ。日本語をしっかりと学んで、もう一度奈良や京都の旧跡を訪ね歩きたいと本心で感じた。

ホームステイは、本当に最高だった。2泊3日の間私は（伊藤）みつ子さんに細心の心づかいをしてもらった。帰国直前には（ソウルの）京子が名古屋の名物だと話をしてくれていた「ひつまぶし」や「きしめん」も食べさせてもらったし、徳川美術館や名古屋城などの名所にも案内してもらった。みつ子さんだからこま

で世話してくれるのだと胸が熱くなった。韓国に戻ってもう3ヶ月がたつ。近くても遠い国といわれてきた日本、こんどの機会を通して日本という国の人々と心の交流ができたのが何よりも良かったと思う。これからは、貴い縁（えにし）を大切にしてくつもりだ。そして、交流パーティの時に宣言してしまったように、こんど行く時には日本語をマスターして行きます（^-^）；みつ子さんと団体の人たち本当にありがとうございました。



◎かけがえの無い体験だった

イ・イエダナ



「旅行は人を成熟させる。」これは誰もが知っている事実であり、旅行が終われば一層成熟した自分自身を発見することが出来る。どこへ、誰と行くのか。そんな事は関係なく旅行は新しいところを見て、感じて、そしてその中から自分の内面に当てはめる。今回の旅行について、私はそう考えていた。新しいところに行き、新しい文化に触れながら学べる事自体にも意味があり、価値のある贈り物だった。そして、1

度の旅行が終わる度に私の中で目が開いていくのを感じる事が出来た。今回の日本旅行では2つの教訓に気付かされ、同時に違う意味の世界を知ることになった。

「知るほど見える」

「知るほど見える」。これは、教授が第1次オリエンテーションで仰った言葉である。ヨーロッパ旅行のときにも学んだ私自身への忠告だった。無知なら無知なほど、知れば知るほど見えてくる。だけど、それは単に文化財に留まる内容ではない。文化財を見ればその場所の歴史が見え、その歴史を知れば国が見え、国を見ればその場所の人たちが見える。人が見えるということは人を理解し、人々と交流する時こそ本当に意味がある。

初日に私たちを迎えてくれた後藤先生が単に親切なだけではなかったことを最後の日になってやっと感じる事が出来た。最初は本当に親切で、心から向かい合ってくれると思いつつ日本人は本当に親切だと思った。しかし、時間が過ぎると我々の国についてや文化、歴史について単に教科書の知識だけを知っている我々よりかはるかに関心が高く、我々に対し本当に心を開

いてくれているんだと感ずることが出来た。その姿から、「知るほど見える」という言葉の真意を知ることが出来た。

「因縁の中で日本を学ぶ」

人との因縁には、どんな次元であろうと意味がある。人との関係の中で一つの国を見て学ぶということは、人々に与えられた機会ではないかと思う。そんな意味から、今回の日本旅行は日本とその文化を学ぶために与えられた貴重な時間であった。後藤先生や鈴木校長先生、そして運転してくださった方を始め、奈良のお坊さんたち、京都大学の方々やホストの皆さんまで全ての人が日本のことを教えてくださった。学べたのは、単に「印象が良かった」という次元ではなかった。その国の民族性に対する認識の時限を越えてその人たちから文化が見え、国が見えた。また、その人たちの韓国に対する態度から、真意も見えた。日本旅行が2回目の私にあって、そんな人たちとの交流から日本に対する思いと暖かさを超えて心底日本を知り感じ取りたいという気持ちを持つようになった。もしもこの機会が「小さな親切」によって設けられたものなら、それほどまでに印象には残らなかったと思う。彼らが韓国語を話すため、必死の努力を尽して話してくれたのは「小さな好意」ではなく本当に私たちに心を開こうとする彼らの努力であり、それに比べ日本語を知らずに日本に下りた私は……。逆に日本の皆さんが我が国に来たら、果たして私はこのように日本語を一生懸命勉強できるだろうか。多分出来ないだろう。彼らとの交流の中で、小さなことにも精一杯努力をする彼らの民族性を、またその中から世界的に成長を遂げる日本の姿を見た。

そして私は多くのことを学び反省した。日本

を探訪するのに、1週間はあまりにも短かった。その時間の中で私は多くのことを学び、多くのことを反省した。単に日本を見てきたのではなく、世界の中で私を省察させる良い機会だった。かけがえの無い、大切な時間だったと思う。この週末には、私を受け入れてくれる家族と出会った。昨日からどこで食事をしようか、どこへ遊びに行こうか迷ったけれど、家族に会えるという思い、それだけでも嬉しくなってくる。日本で大変お世話になった市民ネットの皆さんに、この場を借りて心から感謝したい。この文章と共に再度日本での時間を整理し、今日1日を整理しなければ。



◎心に残る二大古都とホームステイ

キム・ヒョジン

最初に到着したのは法隆寺。大野管長の詳しい説明を受けた後見学できたのは良かったです。中は韓国のお寺よりも大きく、世界遺産の古い堂塔や仏像などもしっかり保存されているのが分かります。これらは日本の影響を多大に受けているというので祖国に対する晴れがまじさに胸がいっぱいになりました。外は快晴。空が高く綺麗な青空は心まで晴れやかにしてくれました。今夜の宿は、日本の伝統旅館。和食のコースを頂き、食後は興福寺まで散歩して戻ってきました。それから女の子だけで部屋に集まって、今日見たものについて色々話をしました。今考えたら、これはこの日に限ったことでは無かったですね。

2日目はまず東大寺を見学。ここでも執事長から良いお話を聞くことが出来ましたが、更に大仏を間近で見るという特別な機会に恵まれ、この機会に参加できて良かったとつくづく思いました。

「私たちが、一人ぼっちで海に捨てられたとします。西の方に島があり、そちらに行けば助かるということは分かっています。しかし、どちらが西の方なのか分かりません。この状況で陽が昇れば、どちらが東か分かりますよね？私たちに、仏教とはそんな存在です。実際には助けてくれるわけではないけど、自らを救えるよう、その方向を示してくれているのです。」



こんな良いお話を、執事長からたくさん聞くことが出来ました。

京都大学では、交換留学で来ている大学院生と交流しました。予想外にも韓国語が上手な方が多く、また英語も上手な方もいて意思疎通は問題なく出来たと思います。オリエンテーションで質問をしたのをきっかけに、ドサクサに紛れてプレゼンテーションに参加。日本と韓国の大学生の違いを調べて準備していたところ、皆さん興味深く見てくださって嬉しかったです。

さて、一番心配していたのはホームステイでした。日本語も分からず、日本の家庭の文化など知る由も無く、何か失敗をしないかとずっと心配していました。幸いにもお世話になった棚

瀬さん一家はとても仲睦まじく、市内からちょっと遠いけど楽しく過ごすことが出来ました。翌日は、ソナと一緒に犬山城へ出発。韓国の城と違って背が高く階段の斜面が急だったけど、上から見える日本の景色はとても平和的でした。また、思いもよらない所へ行くのはとても意義深いことでした。韓国では沢山の高齢者を1箇所集めますが、日本では少数の高齢者を対象に分譲している福祉施設が点在していると聞いています。今回訪問した施設は広くて穏やかで、それでいてリハビリによる治療も盛んに行われています。ボランティアの方々も親切で、また左右の麻痺を区別して設置されたトイレを見て「小さなところにも配慮が行き届いているんだ」と感心しました。

その後は、棚瀬さんのご配慮で着物や浴衣も試着してみました。1人で着るのは難しかったけど、カバンや下駄まで日本の衣装でそろえてみました。

日本に出発するまでは「世界共通語の英語を知っていれば日本語までは必要か?」と思っていましたが、そうではないですね。単に観光のためだけなら英語で十分だけど、相手の国、その国の人たちと文化交流をしていくためには、その国の言葉を最小限勉強しなければと思いました。

◎何度でも日本に行きたい

キム・ソナ



高校生の時に第2外国語として日本語を勉強していたからだろうか、日本がとても近い国に感じていた。去年は数日間旅行で日本に行ってみたけれど、私には少し物足りなかった。しかし、今回は「日本現状教育調査」として、去年とは違う気分で行ってきた。もちろんこれは講義の一環であり、観光でもない。歴史と日本の文化を直に体験できる、大変いい機会だったと思う。朝早い時間から行程が組まれていたが、特にそれが辛いとは思わなかった。一般的な旅行とは違い、法隆寺や東大寺等で住職をはじめ多くの方から説明を受けながら、文化財とそこに垣間見える日本人の文化や思想を学んでいく。それも一つの課程だったようだ。それで我が国の文化財を見るときよりも多くの情報が得られたのだと思う。

日本に行って一番印象に残っていたのは、やはりホームステイではなかっただろうか。私達を出迎えてくれたのは後藤先生だったし、とても印象の良い方だった。最終日。私は2つの家庭でホームステイをしたようなものだった。お昼は棚瀬さんと、夜は後藤さんと。それが私に

とっては一番良いところだったのではなかろうか。日本の人たちが暮らすそのままの様子、そしてその文化を見ることが出来る良い機会であった。お城を見たり、浴衣を着てみたり、ショッピングセンターやカラオケにも行った。これらの体験も記憶に残っているけれど、お世話してくださった方々は我が国に対し並々ならぬ関心があるというのも興味深い。俗に言う「韓流ブーム」、私はこれが一部の人にしか通じない文化の流れかと思っていたが、現実はそのようではなかったようだ。多くの人たちが私たちの文化に興味を持ち、更に私の知り得ないことまで記憶している。私の関心の低さを改めて思い知らされた。

他にも日本の若い皆さんと楽しい時間を過ごすことが出来た。教授の授業をちゃんと聞いて

いなかったら、こんないい機会には恵まれなかったかもしれない。そう思いつつ、教授にも心から感謝したい。日本には2回行ってみたいけれど、まだ行ったことの無いところも多く、何度でも行ってみたい。また、私も彼らのように我が国だけでなく日本の文化についてもっと勉強してみたくなった。毎回旅行に行って思うのは、私が見ている世界はとても狭いものであると今更ながら気付かされること、そして知れば知るほどよく見えるということだ。今回も何も調査せず、また説明も受けずに日本に行ったら、得られたものは今よりも少なかったのではないだろうか。これからも、いろんな所に行ってみて多くの文化を体験し学ぶことが出来ればと思っている。

◎全身で受け止めた日本文化

イ・フアリョン

当初から、日本教育調査へ行くのを決めることは出来なかった。学期の途中で行く踏査である上、専攻科目の授業を2回落とさなければならず負担が大きかったからだ。それでも前回の冬休みに準備していた日本旅行が中止となり、妙な名残惜しさも残っていた。また友達に強く誘われた事もあるが日本に行くことになった。

日本に到着したその瞬間から、日本に行くのをためらっていたのもすっかり忘れていった。ただ微笑みだけが浮かんでくる。日本は色々なものが調和が取れていて、可愛らしさもある。日本に着いてまず不思議に思ったことだ。素朴な日本人の性格が表れているようにも思えた。また、日本はとても綺麗だというイメージが強かった。そんな話を沢山聞いてきたが、実際に自分の目で見てみると更に実感がわいてくる。街中もとても綺麗で、今後機会があれば是非住んでみたいと思った。ホームステイを終えた後、日本や日本人に対する偏見が殆ど消えていった。親切な人が多く、それでいて礼儀正しさが伺えた。私が思っていたよりよく気が利くし、思いやりがあって外国人と一緒にいるとは思えないほどだった。日本の文化に対しても、不健全で文化的思想とは違うかもしれないけれど、私も日本の文化を理解して楽しむことが出来るようになった。

本当に全てのことが新しく、不思議で楽しかった。久しぶりの海外旅行だったけれど、日本での5泊6日が一際早く過ぎていった。ギリギリの日程で疲れたこともあったけれど、日本という国について一つも二つも学んで帰ることに体は疲れても非常に充実して楽しい日程であった。

私が日本に対して強く感じたのは、韓国とよく似ていても違う部分が多いということだ。今回の旅行を通じて韓国と日本の間の文化や歴史について沢山学ぶことが出来たし、日本の文化を全身で感じ取ることも出来た。短い時間だったけれど、世界観を広げ自分を成長させる良い機会だったと思う。





今年の1学期は、学校に行く回数が最も少なかった。4月は1ヶ月間教育実習によって家の近くの中学校に勤務したし、5月には1週間程度日本に滞在していたからだ。今回のホームステイは、学校の授業よりも高い感動を与えてくれた。初めて会う人たちと一緒に行くという緊張感が若干負担に思えた感は否めないが、今そこに行き行って感じたものはそんな点を除いても有り余るほどの大きな意味を持っていた。

空港に到着して出迎えてくださった鈴木先生からは、実は事前に丁寧な手紙が届いていた。こうして予め連絡をもらっていた僕は、お陰で緊張もほぐれ、より一層親しくなれたと思う。2ヶ月が過ぎた今でも、目を閉じると日本での楽しかった日々が鮮明に蘇ってくる。まず最初に思い出すのは、鈴木先生と後藤先生、そしてバス旅行で運転士を務めていた在日の星原さんだった。韓国の文化を理解するため、また韓国人としての自負心をもつため韓国語を勉強している皆さんの努力に心より尊敬の意を表したい。僕も最近外国語を勉強していて思わされたのだが、外国語は勉強すればするほど難しくなる。単語を一つ暗記しても使わなければ忘れるし、聞き取りはもっと難しい。そんなことに挑戦しつつ、韓日間の関係に関わる皆さんは正にその先頭に立つ主人公だと思う。

僕が師範大学に通いながら日本語課を選択したのはどこに理由があったのか。韓日間で何か大きな事がしたくて選んだ道だったけれど、最近は近視眼的なことだけを見るようになったみたいで僕自身も辛いものがある。それでも今回のホームステイを通じて僕とよく似た志を持つ日本の皆さんに会うことが出来たし、そんな皆さんを見て僕も刺激を受けた。社会人になるその時も、今回お会いした皆さんの精神を受け継ぎ、韓日関係の発展に前向きな役割が出来るよう引き続き努力していきたい。



5月23日朝、名古屋空港に到着した。海外へ行くのは、今回が初めて。「うわあ、いよいよ日本の土を踏むんだ…」

空港を後にする前も韓国にいるような錯覚に陥ったが、私たちを出迎えてくれた親切な皆さんの口から出る言葉に日本を実感した。車に乗って移動する際に流れていく景色は、右側の運転席や左側にある信号を除いて韓国と殆ど変わらない。しかし、それは間違いであることに後で気付くことになる。車内で出されたお弁当にトンカツと玉子焼きが入っていたけど、辛いものになれている私にはちょっと合わなかったかな……？甘みが強かったような気がする。

法隆寺では、中門の前で管長のお坊さんが法隆寺と韓国の関係について詳しく話してくださいました。初日の宿は、日本の伝統旅館。部屋の扉を開けるとたたみの濃厚な香りが漂ってくる。

この部屋で眠りについた。夕食では、沢山出てくるコース料理を頂いた。出てくる料理を食べ続けると満腹になり、「もう終わりだろう」と思っているにもまだ出てくる。また、初めて浴衣も着てみたけれど、ぎこちなかった。



二日目は東大寺へ行った。写真を見ると、耳塚へ行った事や豊臣秀吉と徳川家康の話、秀吉の妻である「ねね」の像、こんなことも記憶に蘇る。日本の女性は普通膝を付いて座るが、「ねね」は片膝を立てていた。韓国の女性は楽な姿勢で座るので私は何とも思わなかったが同行した名大生の松本さんは不思議そうに見ていた。

翌朝、まずは京都大学に向かった。そこで出会ったミキさんとは英語でしか会話が出来なかったけれど、私の拙い英語で意思疎通を図るのは難しくもあり、また楽しい時間でもあった。雨が降っているにもかかわらず、外は自転車に乗っている人が多い。不思議だなあ。

この日の夕方からホームステイが始まったが、これほど不安なことは無かった。心配だったのは食事で、「食べられるものが無かったらどうしよう？」と悩んでいた。日本の食べ物と韓国の食べ物は全然違うことも分かっていたので、心配に拍車がかかった。しかし、幸いにもお世話になった梅田さんは韓国語がお上手で少しは気が楽になった。最初はお寿司を頂いた。食べたことが無かったがこれが美味しくて、本当に幸せだった。

気が楽になったせいか寝坊してしまい、翌朝起きたのは9時だった。名古屋・栄のテレビ塔

や「まんだらけ」、大須に行っておやつも沢山食べた。お土産も沢山もらった。この日の夜は家でバーベキューパーティーを開いてくれた。親族まで来てくれて楽しいパーティーだった。中には小さな子もいた。パーティーに来ていた人たちの名前はみな覚えている。その中にサキさんという人がいて、漫画が好きで家にコレクションがあるというが、聞くとトヨタ自動車の本社に勤めるエリートだった。会話は英語でしか出来ないのに、殆どの方は英語が出来ずコミュニケーションが取れなかったのは残念だった。それでも非常に楽しく、もちろんデジカメに思い出と一緒に記録した。

次の日。子供たちが元気に育つよう祈りを捧げるお祭りに出かけた。長い列に並び、お寺に入ると子供たちが祝福を受けていた。この行事に参加した子供たちは、きっと元気に育っていくことだろう。別れる時に握手しようと差し出された手の、何と可愛かったことか。

徳川美術館を見学し、最後に別行動だった友達や他のホストの皆さんも集まってのパーティーに合流した。明日には韓国に帰って日常生活に戻る。そう思うと、とても名残惜しい。梅田さんご夫妻に「今度は日本語を勉強して遊びに来ます」と約束し、別れた。日本語を理解すれば、もっと多くのことが見えると思ったから。外見が似ているので、日本にいることを忘れ、

ついお店で「한 개 더 주세요!(もう一つ下さい!)」と堂々と韓国語で叫んでしまったことを今更ながら申し訳なく思っている。

幸運にもいろんな人たちのお陰で実現した今回の旅行。これが韓教授の仰るようにご縁があるのだとしたら、私はそのご縁に感謝しなければならない。

◎日本語を勉強します！

ウ・ミナ

最初、日本行きの話を聞いた時は教授と共に行く踏査で多くのことが学べる上ホームステイも経験できるので行ってみたかったけど、学期の途中で専攻科目の圧迫も大きく色々日常生活にも影響が出そう簡単には決められなかった。それでも、ふと「来年は卒業だし、今じゃなければいつ経験できるんだろう？」と思い、思い切って参加を決めた。

テレビや本で日本のことはすぐに知ることができ、地理的にもわが国からとても近いので、私は日本のことをよく知っていると漠然と考えていた。しかし、日本に行く前に日本の言語・生活・文化・歴史のどれもよく知っていなかったなので自分でも驚いた。

日本の空港に着くと、風雅で、綺麗で、繊細という印象を受けた。思ったよりも小さい中部

空港とその内外のスマートさ、そしてトイレの泡石鹸にそれを感じることが出来た。この印象は、日本にいる間変えることは無かった。

日本の様々な文化財を見ながら韓国と日本の文化の関連性について考えることが出来たし、同時に日本の歴史と韓国の歴史についてもたくさん学ぶことが出来た。また、解説して頂いた方々からは歴史や文化の話だけでなくいい話も聞くことが出来た。一番記憶に残っているのは、豊臣家と徳川家の勢力争いに見える徳川家康の緻密な戦略についての話で、「神様が人間を救ってくれるのではなく、人間が自ら努力すれば救いの手を差し伸べてくれる」という言葉も印象的であった。ややもすると退屈にも感じられる文化や(仏教も含め)歴史に関する話も、実際に目で確認しながら聞いてみると興味をそそられる。もっと多くのことを学ぶことが出来たと思う。

韓国に帰っても、日本での6日間で時々懐かしくなる。その中でもホームステイしていた時のことをよく思い出す。短い時間の中でも平凡な日本の家庭の温かさや優しさを感じることが出来た。また、ネイティブとして韓国語の授業に参加したことも忘れることは出来ない。

ホームステイへの決断にはためらいがあったけれど、今にして思えば正しい選択だったと思っている。一際しんどい学期の中で日本でのホームステイは私に活力を与えてくれた。大変貴重な経験だったと思う。お陰で私の複雑な気持ちも静まり、無事に学期を締めくくることが出

来た。また、今回の訪問で日本に対する私の考えが変り、更に関心を持つようになった。ただ残念だったのは、日本語が出来ない私と韓国語が出来ない皆さんとの意思疎通が難しかったことだ。今度日本に行くときは、必ずや日本語を勉強して日本語での会話に挑戦してみたい。



☆ホームステイ受け入れホストの感想文

◎**如漢ない。朴 智盛**

会 員 **鈴木幸之助**

事前の資料では、朴智盛君の日本語会話力はほとんど期待できないようであったので、久々に英文の手紙を書いて、取り急ぎ当方の自己紹介をした。初めてのハングルで住所と宛名を書き、返事を待つこと2週間余。メールで英文の返信が来た。

日本から英文の手紙が来たことに驚いたことや課題研究や宿題に追われて返信が遅れたこと、英語が苦手ですいぶん時間をかけて返事を書いたことなどが、たどたどしい英文で書かれていた。

文面から誠実な人柄と毎日まじめに勉学に打ち込む姿勢が推察され、セントレア空港での対面が楽しみになったが、日韓英の会話力の弱点

がそれぞれにある最悪の三角関係であることが分かり、どうしたものかと困惑。まあ何とかなると腹をくくり、来日を迎えた。

空港での最初の出会いの挨拶は泥縄で覚えたハングルでしたが、どうにも口になじまない。他の留学生を含めてすぐ我流の英語での交流となり、奈良の宿舎まで覚えたハングルを一言も発することもなく過ごした。その間朴君とは意思の疎通が思うように図れず、ホストとして先行きが思いやられた。

しかし、夕食後の散策の折、彼が日本語の会話力がかなりあることがわかった。彼は日本語を独学で勉強しているため自信がなかったようで、アルコールと古都の夕闇が彼の緊張感をほ

ぐしたのか、いつの間にか我々はほとんど日本語で会話をしていた。彼の日本語は丁寧語がきちんと使用されたなかなかのものであった。

この夏には日本語の漢字検定を受けること、卒業後は軍隊で将校クラスの訓練を受けること、水原の自宅から毎日電車通学をしていること、専攻の地理学は歴史地理、政治地理、自然地理、環境地理など多岐にわたり、中国へはたびたび教授と同行して研究に行くことなど、卒業近い彼の日常生活が良く分かった。

また、彼はこの旅行中の私の役割をよく理解し、人員点呼やゴミの後片付けなどいつも気配りをしていた。

思えば、彼との交流はこの旅行中が主となり2日間の我が家の滞在中は希薄であった。日韓フォーラムや留学生との交流の夕べの準備などのため午後からは何の世話もできず、ホスト役は会員の山田雅樹さんに委ねてしまった。我が家では、旅行中に処理できなかった大量のゴミの始末を一緒にしたことと酒好きの私との酒談義以外何の体験をしないまま終わってしまった。

若い朴君にはさぞ物足りないホームステイであったと思う。

幸い、7月下旬に子供囲碁教室の生徒の引率者の一員としてソウルを訪問する機会を得た。

彼は空港での別れの際に「ありがとうございました。夏休みは大学の図書館で勉強するつもりです。囲碁はできませんが、お手伝うことがあればします。ぜひ、電話をしてください。」と丁寧な言い回しでお礼の挨拶をした。

好漢なり。朴君。私は「ゴマウォ、ゴマスミダ、カセヨ、トマンナヨ。」と泥縄のハングルをゆっくり羅列しながら彼の背中を押した。



◎ホームステイ受け入れ10年

会員 佐藤栄津英



我が家はホームステイを受け入れてもう10年になります。始めたころ、幼稚園に行っていた息子も、もう高校3年生です。ホームステイだけではなく、いろいろな外国の友人もよく遊びに来る我が家では、息子にとって外国人は珍しいことではありません。中学生ぐらいまでは、ゲストと一緒にボーリングに行ったり、よく遊んでいた息子も、最近は部活や友達との遊びに忙しく、ゲストが来ても何も関心を示さなくなりました。今回の受け入れも、「あ～、また来た」ぐらいの感覚でした。

金曜日にインファンがうちに来て、主人が出

張だったため、3人で夕食を食べました。インファンは一生懸命息子に日本語で話しかけてくれ、3歳しか歳が違わないため、話があったのでしょうか？夕食後、手加減しないといけないので、やりたがらない「Wii」を一緒にやり始めました。意外にインファンがうまく、楽しく遊んでいたようです。

次の日の夜、韓国の友人も遊びに来て、主人も加わり、わいわい盛り上がりながらすき焼きを食べていたら、息子が思いがけないことを言いました。「みんなでボーリングに行きたい」そんなことを言うなんて、想像もしていなかったのが本当に驚きました。もう10時なので、遅いし、また今度にしようと言っても、インファンと行きたいから、と譲りません。中間試験の真最中にもかかわらず、結局ボーリングに行きました。2時までボーリングをやり、私はへとへtoになりましたが、久しぶりに家族みんなでボーリングができ、楽しい時間が過ごせました。

(試験の結果は期待できませんが)

インファンが帰ってからあいかわらず、素っ気ない息子ですが、そんな息子といつか一緒に韓国に行って、インファンに再会できればいいなあと、思っています。



昨年に引き続き女性のホームステイとなりました。何せ狭い我が家、次男が使っている部屋を強制的に明け渡させ、金曜日の朝から女房が掃除を始めました（蛇足ですが、次男は快く部屋を提供してくれました。）。25日夕方、国際センターで対面したユ・ミラン氏、想像したとおりの可愛い女学生でした。22歳（日本風に言えば20歳）、自分の息子達よりも若い。車で帰宅途中、何を話せば良いかと迷いましたが、とりあえず流暢な（？）韓国語で話しかけました。将来は数学の教師を目指す、純真で真面目な女学生との印象を受けました。帰宅後、近所のすし屋で家族だけの歓迎会・食事会、韓国の女性にしては食が細い。（疲れているのかな？）女房の勧めもあり、その夜は早めに寝ることにしました。翌日26日は、彼女の希望で

“MANDARAKE”に行きました。名古屋人の私が全然知らない店ですが、息子がインターネットで調べてくれると、どうもアミメーションの店のようです。お店に行ってみると、何と開店前から列を作っています。よ〜く見ると、ビル全部が漫画関係のお店のようです。入ると同時にいきなり階段を上り始めたので、“何階で売っているのか分かるの？”と聞くと一言、“4階！”、一目散に向かっていきます。韓国のインターネットで調べてきたようです。流石だ^00^。見てみると、一人で店員さんに目的の本を聞いています。（そうだろうな、私に聞かれても分かるはずが無いしね。案の定、本の題名を聞いても全然判らなかつた。）一心不乱で目的の本を探

していました。本にシールがしてあり、中身が確認で出来ないのでは悪戦苦闘していましたが、そこは韓国女性、強引に調べていました。店員から注意されるが、日本語が通じないのでまっ、いいか〜！後で店員に聞くと目的の本は希少価値がある本で店頭にはなかなか出ないそうです。目的の本は買えなかつたようですが、代わりの本をゲットしたようでした。昼からテレビ塔、大須、有松を見て帰りました（大須観音では鳩に悲鳴を上げていました。平和の象徴の鳩が大嫌い顔を顰めている。本当に怖そうだった）。夜は我が家で歓迎会・焼肉パーティーです。

兄・姉夫婦、息子夫婦、姪夫婦にその子供、姪の友達と総勢15人の大宴会となりました。今回も日本語、英語、韓国語と3ヶ国語が飛び交う、インターナショナルなパーティーとなりました。ユ・ミラン氏は若い姪たちと楽しく歓談していました。英語で会話しているようなので内容は分かりませんが。パーティーは17時から22時まで延々と続き、翌日、近所の意地悪爺さんから、賑やかでしたね・・・と激励を受けました。27日は朝早くに家を出て、お稚児さん行列に参加しました。めったに無いチャンスと前から計画していたのです。案の定、韓国ではこんな行事は無いと吃驚していました。化粧した子供たちの姿、煌びやかな装束、人の多さに驚き、珍しいと盛んに写真を撮る一生懸命に撮っていました。お寺の境内ではお坊さんに子供と同じように清めてもらいました。（お坊さんに韓国人だからとお願いすると快く応じてくれた。きっと良いことがあるだろう。ひょっとするとこのご利益で教員試験に合格するかも・・・。）この日は昼からイ・ファリョン氏と合流し一緒に名古屋城、トヨタミッドランを回りました。最後にデパートで弟と妹、オモニのお土産にチョコレートを買って、韓国学校のパーティーに向かいました。（どうしても、日本のチョコレートを買いたかつたようです。理由は不明ですが）。学校では友達も多くほっとしたのか顔つきが違っていました。



パーティの後、ソウルでの再会を約してお別れをしました。今日は朝早く家を出たので、息子夫婦に挨拶が出来なかったことを気に掛けていた。本当に生真面目な心優しい女学生でした。良い思い出を胸一杯に詰めて無事に帰国することを祈念しました。(私の韓国語を2日間聞き続

けたので体調を崩したのと、少し風邪気味で2日間は食欲がなかったようで妻も心配していました。(ソウルに帰って早く体調が戻ることを祈っています。)そして、今回参加したユ・ミラン氏を始めとする学生達が、日本を理解し新しい日韓関係を築いてくれることを確信しています。

毎回、韓国の学生を迎える度に思います。ホームステイが出来る自分の境遇と快く協力してくれる愛妻、手土産を持って集まってくれる息子夫婦・姪達を初めとする家族達の応援に感謝しています。そして学生達も楽しんだと思いますが、本当は私たち夫婦が一番が楽しませてもらっていることを再認識しました。毎回、このような機会を与えてくれるに日韓市民ネットワークに感謝します。

◎「あっとホームステイ^^」

会 員 南 和 也

昨年の3月に新居を建ててから2度目のホスト役を引き受けました。これで5人目の韓国人学生を迎えたことになります。我が家は子供3人(中3、小6、年長)の5人家族です。6人目の家族として迎え入れることになった今回のホームステイの概要は以下のとおりです。



5月25日金曜日の夕方、高麗大学生のカンジョンハ嬢と国際センターで面会后、名古屋市天白区の我が家へ直行、夕食はざるうどんと天ぷらにしました。今までの経験から初回の食事は量が少なく日本のものと考えていましたが、あまり暑くない季節でもあったので、出したものを全て食べてくれました(日本酒も

맛있어요と飲んでくれました)。

二日目は洋式の朝食後(パンと目玉焼き)、家族5人と一緒にまず熱田区にある白鳥庭園を見

学、昼食はイオン熱田ショッピングセンターで味噌カツを食べました。その後、翌日の朝食の材料が無いので買物をしましたが、チョンハさんが友達に日本語版の「星の王子様」の文庫本とシャープペンシルを買いたいと言うので、ショッピングセンター内の本屋さんへ行きました(途中で彼女はとてかわいらしい蛙(?)の枕を買ってました)。それから熱田神宮へ。当日は調度2組も結婚式をやっていたので、チョンハさんにとっては非常に珍しく、良い見学になりました。さい銭も入れてお祈りをしました(何を祈願したのか聞くのを忘れましたが…)。帰宅後、3番目の息子と一緒に近くの公園で野球遊びをして(息子のわがママをよくきいてくれましたねえ)、夕食の準備(ちらしずしと手羽先)も手伝ってもらいました。

三日目は和食(ご飯と干物にお味噌汁)を朝食としてとり、韓国の家族らへのお土産として日本酒や陶磁器、即席ラーメンに緑茶、名古屋名物いろいろを買いに、八事のジャスコへ行き、そこで天むすを買って帰り、自宅で昼食としました。それから名古屋サミットホテルへ荷物を置きに名古屋駅へ行き、そこからタクシーで名古屋城へ直行。夕方に名古屋韓国学校へ行き、交流会に参加。夜の8時ごろに終了、短くも思い出深いカンジョンハさんとの交流を終えました。翌日、彼女は最後の宿泊先のホテルから中部国際空港へ行き、11時ごろの飛行機でソウルへ無事帰りました。

以上が今回のホームステイの概要です。

今回は見学したところが今までと比較してとても少なかったのですが、ほとんどの行程を家族と一緒に回りましたので、チョンハさんにとっても子供たちにとっても良い思い出になったのではないかと思います。私は下手な韓国語で、かみさんは身振り手振りの日本語で（チョンハさんはひらがなは読めますが会話はほとんど出来ません）、長男（中3）は英語（？）で長い時間会話が出来たことが良かったです。一方、長女（小6）は合唱サークルに入っているチョンハさんにピアノを披露してましたが、兄のぎこちなくもコミュニケーションをとっている姿を見て、英語を勉強する意欲が増したようですし、次男（年長）は最後まで言葉の通じないチョンハさんを困らせてましたが、あとから届いた彼

女からのメールは彼の写真でいっぱいでしたので、良い思い出になったことでしょう。

早起きして出かけることも無く、こうしたスローなホームステイもいいかなと思いました。こう思えるのはチョンハさんがとても陽気で素晴らしい学生だったからなのでしょうね。

「あっとホームなあっとという間のホームステイ（私が知人に今回のホームステイのことを伝えたと、こう称していました）」が終わり、彼女は韓国へ帰国後、宿題と期末試験で大忙しのよ

うです。강정하, 화이팅!

◎彼女たちと出会えて良かった！

会 員 棚瀬明子

8月25日夕刻国際センターで初めての出会いから2泊3日。ほんとうに短い時間ではありますが、彼女達は爽やかなこち良い笑顔と出会いの喜びを私にプレゼントしてくれました。

25日夜、雨、地下鉄を名鉄、さらに車と乗り継ぎ、キムヒョジンさんが我が家へ。

奈良、京都からの疲れもあったであろうに食事をしながら、主人の韓国の歴史の話に耳をかたむけてくれました。全く言葉を知らない主人と歴史の話題でコミュニケーションがとれているのには、ちょっと不思議な気がしました。でも主人は大喜び。さすが高麗大学生。

食後、近くのショッピングセンターへ三人で出かけ、ウィンドウショッピング。ベッドに入る前には、「明日は何時に起きるといいですか？」と聞きます。

あいにく主人は、土日にもかかわらず臨時出勤になってしまい、それを話すと両日とも出勤する主人を私と一緒に車の横で笑顔で見送ってくれました。

26日朝、昨日の天候から一変し快晴、近所の後藤さんとキムソナさんも加わって、四人で犬山城周辺を歩きました。お忙しい中、時間を工夫して下さった後藤さんと別れ、ヒョンジンさんとソナさんそして私の三人で入った喫茶店では、店の内装、装飾やモーニングサービス、また老人の多い事に話がすすみ、それではと急遽、老人福祉施設を見学しました。

昼食を済ませた後は、二人に“ゆかた”を体験してもらいました。鏡の前に立ち、後姿の帯の結びも、それぞれに交えてあげると、帯を結んだその姿にとっても喜んでくれた様です。それ

に、とても似合っていて、正直言ってカワイイ！

琴を弾き、音の美しさにもとても喜んでくれました。市内のお寺“曼荼羅寺”を散策し、さらに合流した留学生コ・ミンジョンさんと一緒に夕食の買い物をし、皆でピビンバを中心に食事を作り、家族を含め皆で食卓を囲みました。ドラマの話やドラマを通しての日・韓の文化の違い、表現の違いに話が盛り上がり、とても楽しい夕げでした。



27日快晴。この日もヒョンジンさんとソナさんとの三人連れで名古屋城や栄地下街、徳川美術館を廻りました。夕刻の韓国学校での集いへはタクシーで移動しました。残念ながら翌日都合あって空港で見送る事が出来ない私は、「今夜で

最後だから…」と少しの時間も惜しみながら彼女たちと会話を重ねました。すると彼女たちの口からこんな言葉が飛び出してきました。

「言葉は十分に通じなくても、心と心は理解し通じ合えることがよく分かりました！」

「日本語をぜひ勉強します。勉強して必ず名古屋にやってきます！」

当初、日本に留学したいという思いなど全く無かった彼女たちの口から、「できれば留学して来たい」という言葉が溢れ出てきたのです。嬉しさに胸がつまりました。もう言葉は不要でし

た。私はこの晩、ヒョジンさんやソナさんと心の対話を交わし、「必ずの再会」を約束したのです。

私と韓国との因縁は、2年前から始まっています。知人の2歳になる幼い女の子がテレビの韓国ドラマにひきつけられている不思議さに、私も、つられるように韓流ドラマや韓国語に関心を持つようになったのです。

そして今回は高麗大の女子学生たちとの素晴らしい出会いを体験できました。彼女たちの優しさにも癒されました。深く感謝申し上げます。

◎2度目のホームステイホスト

会 員 山 田 雅 樹

今回は急遽1晩だけ、高麗大学の李和怜

(이화령)さんを受け入れることになった。5月

はなかなか韓国学校に通えず自分の会話能力に自信が無かったが、打ち解けると次第に韓国語で話すようになっていた。また、鈴木幸之助先生・朴智星君と共に本格的な和食を頂いた。これには和怜も満足してくれたようだ。帰りは夜遅くなってしまったが、それでも家族が集まって会話を楽しんでいた。一晩だけの交流ではやはり短すぎる。

翌朝家を出ると、和怜が「韓国に帰ったら日本語を勉強したい」と言ってくれた。とても嬉しい一言だった。日本にはあまり興味が無かったようだが、日本に興味を持ってくれたのだから感無量である。今度会う時は、少しでも日本語で会話が出来るだろうか。そんなことを想像しつつ、空港で握手し別れた。以来彼女が帰ってからもメールでやり取りを続けている。そんな中、去年光州から来た二人の学生を思い出した。「今どうしているのかな…」と思っていると、その内の一人から同志社大への交換留学に参加するとのメールが届いた。名古屋への行き方を教え、名古屋や京都での再会を心待ちにする自分がいた。



◎朴 恩美さんを迎えて

会 員 佐々木 英之

6月には義兄夫婦と韓国旅行を1年前から計画している中、今年は偶然にも5月にホームステイを受けることになりました。高麗大学教育学部専攻の大学院生の朴 恩美さんは礼儀正しく、日本語会話も問題なく、すぐ打ち解け、日が替わるのも忘れて話し込みました。恩美さんは勉強熱心で、少しでも疑問に思うことは、電子辞書で確認してメモを取っていました。今でもその姿が思い出されます。

名古屋で一番見学したいところは名古屋大学

と即言われた時は正直驚きました。2日目は土曜日でしたが、名大構内をほとんど回ることができました。幸いにも教育学部は学会の打ち合わせで扉が開いていて中に入れ、掲げてある大学院教育発達科学研究科・教育学部の教授一覧に李正蓮先生のお名前を見つけ、恩美さんは名大を身近に感じたようです。名大祭の準備風景や剣道部の練習風景も興味深かったようです。3日目は徳川美術館、名古屋城に行きました。説明文をしっかりと読む彼女には見学時間が足り

なかったようでした。

恩美さんは我が家に新鮮な風を通し、すばらしい時を作ってくれました。6月ソウル訪問時には恩美さんと思いもかけず松本さんに市内案内をして頂きました。その日は暑い日で論文作成の忙しい貴重な時間を割いて、私たちのために快く案内してくれて大変感激しました。さらに5年前にホームステイした鄭 英美さんにも会え、懐かしく思い出話が尽きませんでした。彼女は日本語教師採用試験の勉強中とのこと頑張っていました。来名時と同じく、お父さんお母さんと呼んでくれてうれしかったです。

こうした企画をしていただいた後藤さんはじめ、ネットワークの皆さんに心から感謝いたします。

ます。



◎ウ・ミナさんを受け入れて

会 員 荒木日感子

今回、我が家は高麗大学で、数学教育科に通う、ウ・ミナさんの受け入れをしました。

次女とは年が1つ違いという事もあり、我が家に向かう時から、話がはずみ、ファッション、携帯の装飾、食べ物、折り紙の話（次女の趣味）・・・と、賑やかな事と言ったら。（「門前の小僧習わぬ経を読む」と言いますがなぜか次女は韓国語の聞き取りが得意なのです）

翌日は、市内見学と称し、娘がよくお買い物をする店を（安いけど、高級そうに見えるらしいのです）次から次へと制覇！！

その夜は、長女・次女が友達を連れて着てくれたので、若者5人で英語・日本語・韓国語で夜遅くまで大盛り上がりでした。

いくら、超高級マンション（友達には、その様に言いふらしています）といっても、若者5人ともなると、殆ど雑魚寝状態。ホームステイに来てもらって、こんなんでいいのかしらん？？と思っていたのですが、帰る前日、今回のホームステイがどれ程、楽しかったか」を1

人1人に手紙をくれ、「これから先、この友情を家族の血の通う情に育てていきたい」——と結んでありました。

不自由な事も沢山あったろうに・・・ここまで思ってもらっている事に受け入れた私たちの方が心の温くなる二泊三日でした。





회원 마당 会員の広場

◎ 東京だより

会 員：東京大学大学院 産業機械工学専攻 修士1年 李昇勲



第二の故郷の名古屋を離れ、東京に来てもう半年ほど経ちました。東京はやはり巨大なメトロポリタンで、その規模は確かに名古屋よりはるかに大きいと毎日実感しています。この巨大な町で、私にとって今までの人生で最も嬉しいイベントがありました。東京に来てすぐ婚約式をあげ、今は婚約者と二人で楽しく暮

らしています。学校帰りが毎日遅いので、実際に顔を合わせられる時間は短いですが、新婚のような気分がとても幸せです。

学校帰りという言葉で思い出しましたが、東京といえば、出勤ラッシュの地獄のような満員電車が有名です。学校に電車で通う場合、毎朝が苦しくなるのではないかとすごく心配していました。幸いに、私の家の最寄りの駅は終点で、学校まで乗り換えなしで行けるので、毎朝座ったまま楽に登校しています。しかし、目の前で苦しい表情で立っている（空中に浮いているように見えるくらい）人々を見ると、少し申し訳ない気持ちもあります。

東京大学に来てすごいと思った点が一つあります。名古屋大学とは違って、教授一人に、秘書が一人ずつ配属されていることです。さすが東京大学だと思いました。それ以外にも、ただの学生の研究でも、数多くの企業と連携して莫大な資金を使えることに驚きました。これほどのいい研究環境が揃っている学校は全世界的にも少ないのではないかと思います。私の母国の韓国にも早くこのような研究環境ができて、日本と共にアジアの発展のために頑張れるように

なることを望んでいます。
お話ししたいことは他にも沢山ありますが、また次の機会に書かせて頂きたいと思います。最後となりましたが、今回私に投稿の機会を下さった日韓市民ネットワークなごやの関係者の皆様に感謝致します。



◎ウリ豊山ハッキョ

会員 荒木日感子

東大の大学院へ進学した、イ・スンフンの後を受け、私が教え始めて4ヶ月がたちました。

生徒は皆、主婦ばかり（教師もしっかり主婦）9名です。

皆、韓国映画が好き、韓国ドラマが好き、韓国の歌が好き、韓国旅行はもっと大好き！！という人ばかりです。

ですから、韓国語を勉強する姿勢がすごい！と感じます。

一家の主婦が日曜日の午前10時前に教室に集まるというのは大変な事だと思うのですが

（もちろん、その前には予習、復習はもとより、化粧もバッチリしてきますよ）皆さん毎回、イキイキとした顔で教室に入ってきます。

そして、復習したけれど解らない所、疑問の残る処などを、質問してくれます。

又、前回休んだ人などは、特に早く来て、勉強しています。

このクラスの生徒達を見ていると、私が名古屋韓国学校で勉強を始めた頃を思い出してしまいます。

私も、単語を1つでも覚えたい、もっと喋りたい、もっと聞き取りたいと思い、テープがのび、教科書が汚れる程、沢山読んできたことを思い出します。この苦行・・・失礼、この勉強法を教えてくれたのも名古屋韓国学校の先生なのです。この勉強法のおかげでまがりなりにも、今こうして韓国語の教師をされているのだと思

います。

豊山教室でこの勉強法を話したのですが、それ以後全員、家でテープをかけながら沢山読んで、書いてくれている様なのです。なぜ解かるかということ、生徒は授業の度に、各課の長い本文をスラスラと書いてみせてくれるのです。

これが私の自慢の生徒達のいる豊山教室なのです。

そしてこのクラスを教えられて幸せだと思っています。





서울 통신

韓国ソウル市在住 坂野慎治さんのソウル便りです。

韓国 在住生活を基盤として幅広くご活躍されておられるレポートです。
今後とも期待しております。

○ 度量衡法の変更

韓国ソウル市在住 会員 坂野慎治

(梨花女子大学・通訳翻訳大学院講師)

韓国で、7月1日から度量衡法が変わりました。正確に言うと、法律が改正されたわけではなく、メートル法を定着させるために政府が取り締まりを始めたのです。

韓国は、国際的な基準に基づいて1961年にメートル法を導入しましたが、今でも一部で旧来の単位が使われています。46年前にメートル法が施行された後、2～3度大々的なキャンペーンを行いました。それでも習慣を変えられなかったそうです。例えば、坪、匁（もんめ）、斤（きん）などは、今も日常的に使われています。特に不動産店は坪だけで表示し、貴金属店は匁だけを使ってきました。貴金属については、子供の1歳の誕生日に1匁の金の指輪を贈る習慣があるので、それを「3.75グラムの指輪」とは言いづらいのでしょうか。

そのため政府は、「坪や匁などの単位は、細かい数値まで正確に表せないのが、消費者が被害をこうむる恐れがある。メートル法で統一するのが国際的な流れだ」とし、取り締まりを行うことでメートル法を定着させようとしているのです。取り締まる単位は坪と匁で、坪について

は公共機関と大企業、匁については貴金属店が対象です。違反をすると罰金50万ウォンが科せられます。「～匁（～グラム）」というように併記をしてもいけません。

さらに、管轄省庁の産業資源部長官は「坪と匁は韓国の伝統的な単位ではない。匁は日本が植民地支配下で貴金属販売を独占するために使用した単位だ。子孫に残してはいけない」とまで話しています。しかし専門家によると「大きさは変わったが坪は朝鮮時代からあった単位だ。いくらメートル法の定着が大切だといっても、こうした理論の飛躍はいただけない」ということです。

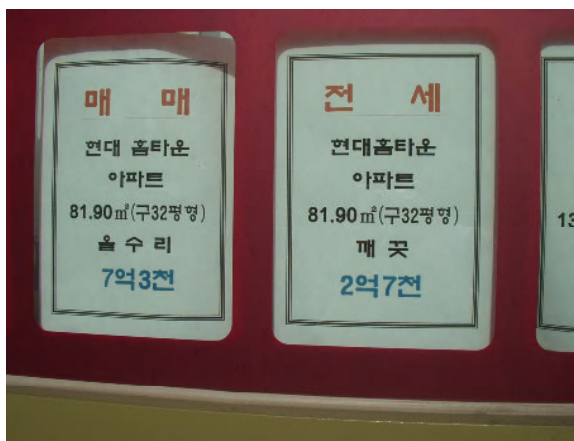
確かに斤という単位は、肉は600グラム、野菜は375グラムと誤解を招く恐れがありますが、今まで問題はなかったので、「併記するだけで十分だ」「取り締まりの必要はない」という意見も出ています。

施行から1か月ほど経った7月末の調査によると、公共機関、大企業、不動産店、貴金属店の51%がメートル法のみを使用しており、33%が併記、16%がメートル法を使用していません。

また世論調査では、メートル法定着の必要性に共感するという人は54%でしたが、不便だと感じている人も56%なので、急な変化に戸惑っているようです。そのため不動産店では、32坪のマンションを「32タイプ」と表示しているところもあります。貴金属店では、店員がグラムで説明しても 匁に換算してくれと言う客が多いそうです。

今回の措置でまだ混乱はありますが、時間が経てば新しい単位が定着するでしょう。しかし、政府の広報不足が混乱を大きくしたのは事実です。今回の取り締まりは昨年10月に決まっており、ラジオ放送やステッカーなどで広報してきたといいますが、一般の人はほとんどが知りませんでした。私も、施行後に新聞やテレビニュースで知っただけです。以前施行された生ごみの分別収集や、タバコのポイ捨てに対する罰金も、役所から事前の案内がなかったので驚くばかりでした。しかし、こうした急激な変化や政府による一括的な対応が、韓国のスピード感あ

る発展につながったともいえるので、今回のような方法が韓国に適しているのかもしれませんが。



写真：ソウル市内の不動産店。不動産店の坪表示はまだ取り締まりの対象ではないので、括弧の中に「旧 32 坪型」と併記されています。



◇お知らせ・紹介

この欄は、会員の皆さんへ各種ニュースや1～3ヵ月先のイベントのお知らせや、その他もろもろの紹介をしていきます。 会員の皆さんからの情報も待っています。

1) 歴史写真パネル展示会『語り継ごう在日を！』

在日韓国人の歴史のはじまりと言われる、乙巳条約から100年以上が経過しました。

日本に住む在日韓国人も、戦前・後の苦難の時代から、今や市民レベルでの交流も行われような時代が変わってきました。同じ地域社会で懸命に生きてきた在日韓国人の歴史を、セピア色の約100点写真で振り返り、共に生きる在日韓国人の存在を改めて垣間見てください。

日時：2007年8月31日（金）～9月7日（金）

場所：愛知県名古屋市中区栄 セントラルパーク内 市民・情報ギャラリー

2) 第11回 韓日歴史・文化フォーラム

テーマ：食文化の中の日本と朝鮮

日時：2007年9月26日（水） 午後6時開演（午後5時 受付開始）

会場：民団愛知県本部（愛知韓国人会館） 5階ホール

名古屋市中村区亀島1-6-2 Tel. 052-452-6431

地下鉄東山線「亀島駅」下車、3番出口から西へ徒歩1分

会費：500円

その他：会場には駐車場がございませんので、当日お越しの際は公共交通機関をご利用下さい。

問合せ：韓日歴史・文化フォーラム事務局 丁光荣（チョン・コァンヨン）まで

お問い合わせください。

TEL 052 - 452 - 6431

Eメール: jigyo@mindan-aichi.org

編集後記

(2007/8/23)

会報 No. 38 をお届けします。今年は大変残暑が厳しいですが、皆さん体調などいかがでしょうか？この夏は例年以上に地球が悲鳴をあげているような気がします。

夏の会報は例年もう少し早く発行されるのですが、今年は行事の都合や記事及び編集のスケジュールの都合もあり、遅くなりました。会報を楽しみにしている方々の中には、会報が届かなくて不安に感じた方もおられるかもしれませんね。でも、今回も会員の皆さんや協力者、韓国の学生たちがたくさん記事を送ってくれたので、ボリューム的には大作になりました。引続き会報の記事の投稿をお待ちしております。

池貴巳子さんのイラストは、NHK ラジオ講座 1995 度から、韓国の古典を題材としたものです。

編集：早川 潤 〒472-0002 知立市来迎寺町木ノ根田 10-4
TEL/FAX 0566-82-5466 MAIL junhykw@pop12.odn.ne.jp